

韓国語母語話者の自然発話における漢語の使用

高木 南欧子

The aim of this study is to analyze the usage of *kango* by Korean international students, who are in the advanced course of Japanese, in oral expression in interview sessions. By exploring usage examples, it became clear that Korean learners of Japanese have a substantial vocabulary of *kango* and, as expected, *kango* definitely provides an essential source of vocabulary to discuss abstract theories. However, this alone will not mean that they have sufficient linguistic proficiency without additional learning. The results also indicated that familiarization with words under a given situation would facilitate language acquisition.

キーワード：漢語，留学生，抽象性，韓国語，OPI

1. 研究の背景と目的

コミュニケーション能力の養成と評価は、目に見えない音声を対象とする点で困難が伴う。学習者の母語の特徴や学習者の自身の性格や個性，さらにその場の雰囲気，即時性や相性なども含めると，教師が配慮すべき学習者の背景は多岐に渡る。しかしながら，日本語教育における口頭運用能力の養成は，文法項目の学習に付随的に行われることが多く，口頭能力表現の評価基準の共有の中で教室活動が行われてきたとは言い難い。口頭運用能力の向上を目的とするシラバスの開発も多くの試みがあるものの，まだ開発の途上にあると言える。

これは大学の留学生を対象としたコースデザインを考える上でも重要な問題である。学部留学生は，発話の流暢性だけでなく，内容の一貫性や論

理的な陳述、独自の視点に裏付けされた意見を求められる。既習の言語知識を駆使しつつ難しい話題について筋の通った意見を述べることができる学生がいる一方、言語知識が豊富であるにもかかわらず論述を苦手とする学生がいる。近年、言語教育においては、遂行する能力の養成に注目が集まっている。何ができるかを重視する「Can-do-statements」（例示的能力記述文、以下Can-do）によって言語教育を考える動きが世界的に広まっている中、「できる」ようになるためには一体何が必要なのだろうか。

アメリカのACTFL (*The American Council on the Teaching of Foreign Languages* : 全米外国語教育協会) はACTFL Proficiency Guidelines (ACTFL言語運用能力基準) を示している。この基準により、OPI (*Oral Proficiency Interview Test*) という口頭能力を測るテストが開発された。日本語教育においても日本語OPI (以下OPI) として広く知られている。ここで示されている指標を参考にすると、一般的な大学学部の授業参加には、少なくとも「段落の長さで、しかも内容のある連続した談話の枠組みを使い、適切さと自信を見せながらコミュニケーションを維持できる」(牧野他2001: 66) という上級のレベルの力が必要だと考えられる。この力がないと、例えば少人数のゼミ形式をとった学部の授業などに十分に参加できるとは言えないだろう。

抽象的な事物の叙述は、上級からその兆しが見られる。しかし、「超絶話者は具体的にも抽象的にも裏づけしながら話せるのに対し、上級話者は、具体例のみによる裏づけしかしておらず、また、概念的な内容に対しても、具体的にしか返答」しない(荻原他2010: 95) という指摘もされている。抽象的な概念の説明を行うためには、漢語の使用が必要だというのは経験的に言われているところである。この漢語の熟達度が課題の達成にどのくらい影響を与えるのかは、今のところ不明であるが、抽象的な漢語が上級以上のタスクの遂行の支えになるのであれば、類似の語彙や漢語を持つ韓国語母語話者の発話には、抽象的な概念を示す語彙や叙述が早い段階で出現すると予想される。

そこで、本稿においては、中級と上級の韓国語母語話者の日本語の発話に出現する漢語を調査し、抽象的な叙述との関連を考える。韓国語母語話者の日本語学習においては、正の転移、負の転移の影響が大きいことが指摘されているため、抽出語彙の意味の重なりの有無についても調査を行う。

2. 先行研究

OPIにおいて、抽象的内容の論述がどのようにされるかに関しては、荻原他(2001)、荻原・齊藤(2010)などの研究がある。荻原他(2001)では、3つの発話内容領域(Ⅰ.身近な具体的事実を直接的に言う、Ⅱ.個人的一般的関心事の具体的事実を詳述する、Ⅲ.抽象的内容を論じる)を軸とし、上級、超級話者の発話の特徴の分析を行い、上級から超級へ上がるに従って、和語、漢語ともに増えることが指摘されている。また、荻原・齊藤(2010)では、抽象性について心象性と具象性へ三つの段階が設定され、日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者の上級、超級話者の談話から、漢語の使用について荻原他(2001)と同様の結果が確認されたことが報告されている。また、抽象的に意見を述べるための指針としてより抽象度の高い表現に変えていく指導例が提言されており、そこに見られる言い換え例は、漢語の使用率が高いものとなっている。

OPIにおける語彙研究に関しては、山内(2004)がデータ数と異なり語彙の形態素数の関係を示し、実質語の出現が話題に大きく左右されることを示している。また橋本(2010)は、OPIにおける使用語彙を「話題」によって分類している。その結果、一定の必要語彙数が想定できる話題と、そうでない話題が中級、上級にあることが明らかになっている。

これらの知見が生かされた教材としては、『日本語上級話者への道 きちんと伝える技術と表現』、『日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』などの会話教材や、初級の早い段階から対話力の養成を目的としている『できる日本語 初級本冊』などが出版されている。

3. 調査について

本稿では、「簡単で、直接的な会話に参加できる」(牧野他2001:78)ことが期待される中級話者と、「一部の話題については抽象的に論じることできる」(牧野他2001:223)とされる上級(上-上)話者、「しばしば意見を述べたり条件に言及したりできるが、終始一貫して複段落で構成された議論をするほどの能力はない」(牧野他2001:225)とされる上級(上-中)話者のOPIにおける談話を分析対象とした。これらのデータで用いられた漢語の特徴を見るため、OPI判定の難易度ごとに延べ語数と異なり語数を比較する。また、用いられた語彙の抽象性をみるために、抽出語彙の分類を行う。使用するOPIの被験者はすべて韓国語母語話者とする。分析の具

体的な手順は3.2のとおりである。

3.1 調査方法

上級話者のデータとして、高木（2013）で使用した発話データ4本、中級話者については、「KYコーパスver.1.2」¹のうち、中級-中と判定された6つからランダムに4本採用する²。分析にあたっては、発話が文字化されたテキストの中から、インタビュアーの発話を削除し、被験者の発話のみを分析の対象とする。発話のテキストの解析には、形態素解析エンジンMeCab、形態素解析用辞書にはUnidic³を使用する⁴。

語彙の具体性、抽象性、親和性の判定には『実践日本語教育スタンダード』の分類によって行う。リストにない語彙に関しては、類似の語彙を参考にし、筆者が判定を行う。

3.2 語彙の選定について

2の先行研究で見たように、抽象的な発話を支える語彙は実質語であると考え、分析にあたっては、山内（2003）、橋本（2011）に倣って実質語（実質形態素）を対象とする。そのため、まず3.1の手順に従って形態素解析を行い、「名詞」（固有名詞と数詞は除く）、「副詞」、「形状詞」に分類されたものを抽出する。さらに、そこで得られた実質語の中から、漢語として区分されているものを抽出する。漢語には中国語からの借用語を起源とする漢語、漢字表記の音読みを利用した和製漢語、西欧語の訳語として造られた翻訳漢語などがあるが、本稿ではこれらをすべて漢語として扱う。また、語彙の選定にあたっては、1字からなる漢語は、意味範疇が広いものが多く、韓国語との対照が困難になると考え、分析対象から除外し、意味範疇が限定しやすいと思われる漢字2字からなる漢語に限定する。

4. 語数と語彙多様性

4.1 語数の算出方法と語彙多様性の測定

分析においては、延べ語数、異なり語数から、各被験者によって用いられた語種の多様性を見る。橋本（2014）では、語彙多様性がGuiraud値によって測られている。語彙多様性とは、「そのタスクを達成するためには、どれくらいの種類の実質語を必要とするか」ということを示す。延べ語数に対して異なり語数が多ければ、そのタスク達成のために用いられた語彙

の種類が多かったということになり、逆に延べ語数に対して異なり語数が少なければ、運用された語彙の種類が少ないということになる。本稿では橋本（2014）に倣い、Guiraud値を用いて話者ごとの語彙の多様性を測ることとする。Guiraud値は、Type（異なり語数）をToken（延べ語数）の平方根で割って求められた値であり、値が高い方が語彙多様性が大きいということを示す。

4.2 結果（語彙の多様性と発話内容領域）

3.2の基準によって抽出した漢語の語数を計算し、4.1で見たGuiraud値を算出した。話者ごとの数値を以下に示す。

表1 話者ごとに見た2字漢語

話者番号（データ出典）	OPI 判定	延べ語数	異なり語数	Guiraud 値
S1（KY コーパス）	中-中	124	55	5
S2（KY コーパス）	中-中	154	74	6
S3（KY コーパス）	中-中	178	84	6.3
S4（KY コーパス）	中-中	154	82	6.6
S5（高木 2013）	上-中	184	82	6
S6（高木 2013）	上-上	274	105	6.3
S7（高木 2013）	上-上	215	100	6.8
S8（高木 2013）	上-上	244	105	6.7

個人差は見られるものの、具体的に話すことが要求される中級から、叙述が必要とされる上級へとタスクが難しくなるにつれ、用いられる語彙の種類が増加していくのがGuiraud値からうかがえる。また、延べ語数と異なり語数そのものに注目すると、中級と上級ではかなりの違いがあることが分かる。

使用頻度の順位上位 n 番目までの語彙で、その言語の語彙がどの程度理解できるかを示す割合をカバー率という。秋元（2002：42）は、「上位 2,000語を知っていると、英語は86.6%、フランス語は89.4%、朝鮮語は

81.2%の語彙が理解できるが、日本語だと70.0%しかわからない」としているが、中級と上級における漢語の使用語数に大きな差が出るのは、このカバー率が影響している可能性もある。

8名の発話の内容の性質を、2で見た荻原他(2001)の発話内容領域を参考に分類すると、S1, S2, S3, S4は、「Ⅰ. 身近な具体的事実を直接的に言う」、「Ⅱ. 個人的一般の関心事の具体的事実を詳述する」とどまり、「Ⅲ. 抽象的内容を論じる」に分類される発話は見られない。S4において行われた、映画の説明を求められた場面の応答を(1)にあげる。発話内容領域はⅡに分類されると考えられるが、応答の様子を見ると、適切な語彙が見つからなかったために十分な説明ができず、Ⅱの領域を超えたタスクにはすすまなかったように思われる。なお、Tはインタビュアーで、Sは被験者を示す。〈 〉は相づち的な聞き手の発話を示す。

(1) (今まで見た中で一番良かった映画のあらすじを説明した後の会話)

T: どんな映画が好きなんですか、悲しい映画か楽しい映画とか

S: 悲しいと楽しいと、あ区別はできないけど、〈んーんーんーんー〉うーん、乱暴、乱暴の〈ええ〉ような映画、それは、余り好きではありません

T: ははははなるほどね、なるほど、まあじゃあ日本にきて一か月ぐらいですけどなにか困ること、困ったこととかありますか

(KYコーパス：ファイル番号KIM04)

次にS5, S6, S7, S8の発話の内容を見る。4名の発話においては、社会的、時事的話題において、抽象的なレベルで意見を述べるよう求められたタスクがあり、「自分自身の意見を明白にし、その意見を裏付けるために、うまく構成された議論をする」(牧野 2001, p.73)という超級の基準を十分に満たすまでにはいかないものの、抽象的に論じることに成功している部分もある。発話内容領域という観点で見ると、4名の発話のすべてに領域Ⅰ、領域Ⅱ、領域Ⅲが認められるが、「超級は領域Ⅰに対してⅡで、領域Ⅱに対してⅢで答えることもあり」荻原他(2001, p.100)と指摘さ

れているような言語運用も見られた。

(2) (他の国の留学生についての印象を具体的に説明した後の会話)

T：日本人に対しても同じように感じませんか

S6：結構こっちは シャイっぽい人が結構いますよね 友達作りが結構苦手って言うか 日本人の人たちが 自分の個人スペース 結構広いって言うか 韓国とは結構違う部分があって その一、最初に留学来た時には結構苦労しました

T：それはどうやって克服したんですか

S6：日本人は受け身が強い感じです だから 私がもっと積極的に近づいていくしかないと思って 声をかけたり そうしました

この話題の前段階として、インタビュアーは、他の国から来た留学生に対しての具体的で直接的な説明を求めており、その流れで日本人についての印象を聞いている。しかし、S6は、個人的な経験を超えて、抽象的な概念で内容をまとめてから、具体的な自分自身の経験を描写している。文法的な誤用はあるものの、談話構成としては簡潔にまとまっている印象を受ける。用いられている語彙には、英語からの借用語も見られる。近年のカタカナ語の増加現象の一端が垣間見えるが、運用能力の高さから、S6はカタカナ語を使わずとも同じ内容を話すことができたと考えられるため、考察からカタカナ語については除外する。

発話の流暢さという点では、S6はS4に比べ高いように感じ取れるが、語彙の難易度という点ではそう難しい語彙を使っているような印象は受けない。(2)のS6の発話部分をリーディングチュウ太⁵を用いて語彙のレベル判定を行うと表2のような結果が得られた⁶。語彙そのものに意味内容があるものを実質語の類、文法的な役割を担う助詞や助動詞、接尾辞を機能語の類とした。フィルターは分類から除いた。

表2 S6の(2)における発話の難易度

難易度／語彙	実質語の類	機能語の類
級外	近づく, シャイ, 韓国	って
1級	受け身, スペース	作り
2級以下	ある, 言う, いく, 思う, いる, かける, 感じ, 来る, 苦勞, 声, 個人, こっち, 最初, そう, 自分, する, 積極的, 違う, 時, 友達, 日本人, 強い, ない, 苦手, 広い, 人, 部分, もっと, 留学, やる, 私	は, が, に, て, と, の, か, よ, ね, た, ます, です, だから, しか, たり, っばい, その, たち

表2を見る限りでは、難易度が高い語彙はそう多くない。「友達作り」や、「声をかける」のように、連語や接尾辞を用いて語彙の意味を広げることにより、豊かな表現を可能にしていると考えられる。一方、実質語の類の1級と級外に分類された「近づく」「受け身」に関して考えると、これらは(2)で行われた発話内容を意味的に支える重要なキーワードであると考えられる。もしこれらを使わず、代わりに2級以下の語彙で説明しなければならなくなると、おそらく長い説明が必要になり、焦点がぼやけてしまうだろう。

このように見ると、所与の話題において、タスク達成のために必要なキーワードがあるとすれば、その割合は、発話の述べ語数に対して非常に低いものになることが予想される。振り返って、表1で見たGuiraud値の差がレベルごとによってあまり大きいものではなかったことを併せて考えると、言語化されるキーワードの数は多くはないが、それが選択できないためにタスクの達成が困難になった、という説明が可能であるかもしれない。

ここで、一つ上のレベルの言語運用をするためには、言語知識として知っている語彙が多数必要なのかという疑問が起こる。韓国語には、日本語と類似の語彙が多く存在すると言われている。次の5では、韓国語を母語とする日本語学習者の発話を見ることとする。

5. 韓国語との類似

5.1 同形の漢語について

語彙（漢語）の数が多ければ、抽象概念の説明を必要とする難易度の高いタスクが達成できるのか、という問題に対し、日本語との類似が指摘される韓国語における漢語との意味関係を見ることとする。ここでは、表1で抽出された漢語について、韓国語との同形の有無と意味の一致をみる。韓国語においては、日本語と同様、漢字2字からなる語彙も豊富で、尹(2013)による両言語における2字漢語の分析や、データベースの開発などもすすんでおり、同形や発音、意味、用法の類似や差異によって負の転移も正の転移もあることが指摘されている。しかしながら、ここでは対照言語的な分析は行わず、用いられた日本語の語彙に韓国語の同形の語彙があるかどうか、及び、語彙が担う中心的な意味がおおまかに一致するかどうかの確認のみを行う。

5.2 結果（同形と意味の一致）

韓国語を母語とする2名のインフォーマントの協力を得て、発話に用いられた語彙の同形の有無と大まかな意味一致の確認を行った。ゆれがあるものに関しては、辞書の記述を手がかりとした。表3の「同形有り」は、当該語彙の漢字を韓国語読みした場合、同音か、またはそれに近い語彙が有るか無いかを見たものである。意味一致の「○」は非常に大まかにではあるが、基本的な意味が一致する、「△」は、意味の一部が共通する、あるいは一般的ではないが辞書に記述がある、「×」は違う意味になる、「同形無」は、その漢字を用いた2字漢語はないことを示す。なお、調査にあたり、両言語における当該語彙の品詞・文法的差異、語用論的な正用・誤用、スピーチレベルや文脈、場による制限などの考慮は行わなかった。話者番号の下の（ ）は、4.2で見た各話者によって用いられた異なり語彙数を示している。

表3 タスク達成のために用いられた漢語と同形の韓国語の有無と意味一致

		S1 (55)	S2 (74)	S3 (84)	S4 (82)	S5 (82)	S6 (105)	S7 (100)	S8 (105)
同 形 有	意味一致○	42	65	73	68	66	91	86	91
	意味一致×	2	0	3	1	0	0	0	0
	意味一致△	3	1	1	4	4	3	5	4
同形 無		8	8	7	9	12	11	9	11

表3を見ると、高い確率で同形の漢語があり、非常に大まかではあるが、基本的な意味の一致が認められる割合が高いことが分かる。各話者の異なり語数を母数とした場合、意味の一致が見られた同形語の語彙数と、同形語が無い語彙数の割合がそれぞれどのようなようになるかを表4でみる。

表4 異なり語数における同形語数の割合

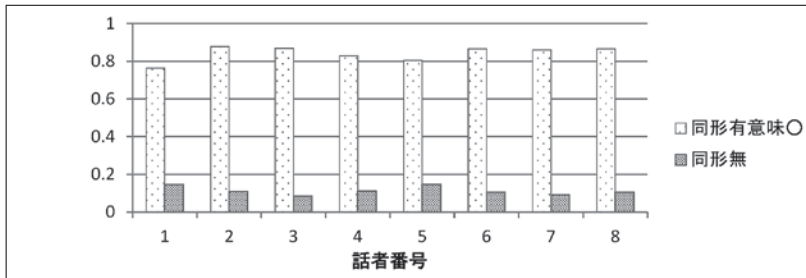


表4を見る限り、個人差はあるものの、話者やOPIのレベルによって大きな違いは見られない。話者によっては、発話時に負の転移に対する修正や確認を行いながら語彙の運用をしている可能性もあるが、このデータには、誤用や、インタラクションによって行われた誤用の訂正は考慮されていないため、誤用や正用の出現数や割合については不明である。しかし、負の転移が行われているものも含め、そのすべてを動的な言語運用の中で用いられた語彙として大きく捉えたとすれば、他の言語を母語とする学習者に比べ、学習言語に対するカバー率はかなり高いことが予想される。以上のことから考えると、理解語彙の漢語が相当数あっても、それが端的に

抽象的な論述の遂行に結びつくわけではないということが考えられる。では、タスク達成のために使用された漢語はどのような意味特性を持つものであったか。語彙を抽象度、親密度などによって分類を行ったものに『実践日本語教育スタンダード』がある。以下では、まずこの分類の方法を紹介する。次に、その分類方法によってタスク達成に使用された漢語を意味特性によって分類し、中級、及び上級における特徴を見ていくこととする。

6. 語彙の意味特性

6.1 抽象概念と難易度

『実践日本語教育スタンダード』においては、8110語の語彙(実質語)が、「話題に従属する語彙」と、「話題に従属しない語彙」という大きな概念に分けられ、さらに100の話題と20の概念カテゴリーによって分類されている。例えば、「うどん」は「食」に関する話をする際に用いられる語彙であり、かつ具体物であるので、「話題に従属する実質語」、「名詞」、「具体物」に分類される。一方、特定の話題に限らず、様々な話題に登場し得る、汎話題的とも言える実質語もある。例えば「口実」という語彙は、さまざまな話題で用いられることが可能である。そのため、これは「話題に従属しない実質語」、「因果関係」に分類される。

表5は、山内(2012)を参考にしつつ、『実践日本語教育スタンダード』の基準の図示を試みたものである。「話題に従属する実質語」は、「具体物」、「抽象概念」、「叙述」、「修飾」、「その他」の5種類、「話題に従属しない実質語」は、20種類の意味的カテゴリーに分類される。なお、語彙によっては、一つの語彙が、複数の話題、複数の区分に分類されることもある。

表5 『実践日本語教育スタンダード』における実質語の区分

	話題に従属する実質語	話題に従属しない実質語
名 詞	「うどん」 食名詞：具体物 A	「口実」 因果関係 *全部で20 カテゴリー
	「食欲」 食名詞：抽象概念 C	
構 文	「食事する」 飲食構文 B：叙述	
	「繊細(な)」 酒構文：修飾 B	
その他	「～皿」 食：B	

表5に示したように、「名詞」「構文」の語彙には、3名によるレベル判定A, B, Cが付与されている。「名詞（具体物）」に関しては、表6のような「新密度」を基にした α 基準によって判定がなされている。ただし、語彙によっては、ある話題ではA判定であったものが、別の話題ではB判定になっているものもある。

表6 具体物を表す語に関する基準（ α 基準）

レベル	記述
A	一般的な日本人が非常に身近であると感じる語。
B	一般的な日本人がやや身近であると感じる語。
C	一般的な日本人が身近であるとは感じない語。

（『実践日本語教育スタンダード』 p.11）

また、「名詞（抽象概念）」、「構文（叙述）」、「構文（修飾）」に分類されたものは、「必要度」のような概念を基にした β 基準によってレベル設定が行われている。語彙によっては、ただし、ある話題ではA判定であったものが、別の話題ではB判定になっているということもある。

表7 抽象概念を表す語に関する基準（ β 基準）

レベル	記述
A	この語が使えないと、最低限の会話が成り立たない。あるいは、ティーチャートークでも使えそうな、やさしい日本語であると感じられる。
B	まとまった話をするためには、この語が使えた方がいい。このレベルの語群が使用できれば、とりあえず困ることはない。
C	この語が使用されると、話の抽象度・詳細度がぐっと高まったように感じられる。やや専門的になったようにも感じられる。

（『実践日本語教育スタンダード』 p.11）

6.2 話題に属さない語彙

表5の区分を用いて、「4. 語数と語彙多様性」で抽出した漢語を「話題」

の観点から見る。使用するデータは、4.2で見たデータのうち、Guiraud値の一番高いものと低いものを選定した。各被験者によって用いられた2字漢語の異なり語数、延べ語数のうち、6.1でみた基準を参照し、話題に従属する漢語と、従属しない漢語の数を調べた。()内の数字は、それぞれの異なり語数、延べ語数を母数とした場合の割合を示している。

表8 S2とS7の発話において見られた話題に従属する漢語としない漢語

	S1		S7	
	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数
	55	126	100	215
話題に従属しない	11 (20%)	31 (25%)	22 (22%)	57 (27%)
話題に従属する	44 (79%)	95 (75%)	78 (78%)	158 (73%)

表8を見る限り、異なり語数も延べ語数も、各話者内における割合においては、大きな違いは見られない。両者において、異なり数の割合が延べ語数の割合に比べて低くなるのは、機能語のように同じ漢語が繰り返し使われているからだと思われる。使用頻度が高いものを上から3つあげると、S1においては「一緒」(9回)、「簡単」(5回)、「一番」(4回)であり、S7においては「多分」(8回)、「一応」(6回)、「結構」(5回)であった。S7において使用された漢語は、話し手の判断や命題への態度、モダリティとの関連が高いように思われる。ここで得られた「話題に従属しない実質語」をカテゴリーに分類すると、表9のような結果が得られた。

表9 S1とS7における話題に従属しない語彙のカテゴリー分類

S1	【名・定義・分類・等級】普通・様式・一番 【位置関係】周囲 【量】一番 【推移・過程】一番 【時間関係】金曜、土曜 【類似・相違】一緒
----	--

	【難易】 簡単, 便利 【程度・限度】 一番, 大変, 全然
S7	【名・定義・分類・等級】 一緒, 一番 【位置関係】 現地, 範囲, 方向 【量】 一番 【時間関係】 今度, 最近, 平日 【関係・関連】 一般, 大体, 一応, 関係 【因果関係】 目的, 要素 【類似・相違】 一緒 【程度・限度】 一番, 以外, 以上, 結構, 全然, 大体, 多分, 完全 【蓋然】 多分, 勿論

表9で分類された意味的カテゴリー全体を見ると、特に出現率の高い意味的カテゴリーがあるようには思われない。S7において用いられた漢語は、「程度・限度」に分類されるものが多いように見られるが、「一番」や「多分」は複数のカテゴリーに渡るため、「程度・限度」の語彙だけが突出して用いられたということではない。しかしながら、S1に比べS7の方が多岐に渡っており、意味的に広がりや深さを持っているような印象を受ける。

韓国語との類似を見ると、S1において用いられた漢語のうち、「同形無し」が2つ、「同形有だが意味一致しない」、「同形有だが意味が一部だけ共通」が1つずつであった。S7において用いられた漢語は、「同形無し」が4つ、「同形有だが意味が一部だけ共通」が2つであった。数の上から見ると、両者に大きな違いがあるようには思われない。

リーディングチュウ太で難易度を見ると、S1の場合は、1級が1つ、2級が1つ、3級語が3つ、4級が6つであったのに対し、S7の場合は、1級が1つ、2級が9つ、3級が8つ、4級が4つであった。

運用語彙（漢語）という観点から見ると、S1の場合は、母語との類似や意味カテゴリーによるものよりも、学習項目の難易度との相関が強いように思われる。教科書や教室における学習項目の策定は、リーディングチュウ太に示されるような旧日本語能力試験の難易度に準じて提出順序が決められていることが多く、S1によって用いられた漢語は、ほとんどが初級の早い時期に学習されるものである。

S7の発話において2級として分類されたものは、「一応」、「一般」、「完全」、「範囲」、「平日」、「方向」、「要素」、「状態」、「目的」であり、3級は「大体」、「勿論」、「以外」、「関係」、「今度」、「最近」、「全然」、「以上」であった。2級に分類された漢語においては、事象を総称するような抽象的概念を示す語彙が増えている。この多くは、中級以降の教科書で扱われていることが多い。

このように考えると、表9の結果は、知識として語彙（漢語）を知っていても、目標言語でその語彙を運用できるとは限らないことをデータで示していると言える。また一方で、学習は運用語彙の習得との関わりに大きく影響していることが改めて感じられる。

それではここに、抽象的な概念はどのように関係するのだろうか。次の章では、漢語の抽象性について考察を行う。

6.3 親密度と必要性

ここでは6.2で「話題に従属する実質語」に分類された語彙について考察を行う。S1とS7において用いられた漢語（異なり）を、表5の基準に基づいて分類を行った。それぞれの異なり語を母集団とした場合の割合を、表10-1、表10-2に示す。

表 10-1 S1の発話における漢語の抽象概念

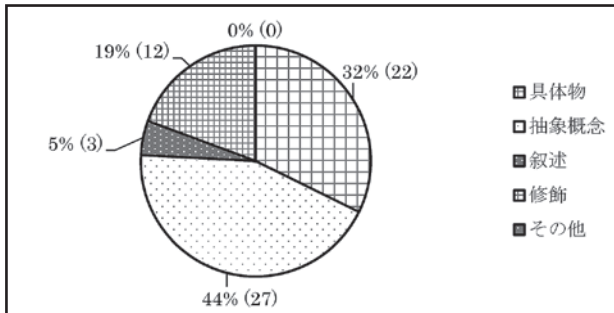


表 10-2 S7の発話における漢語の抽象概念

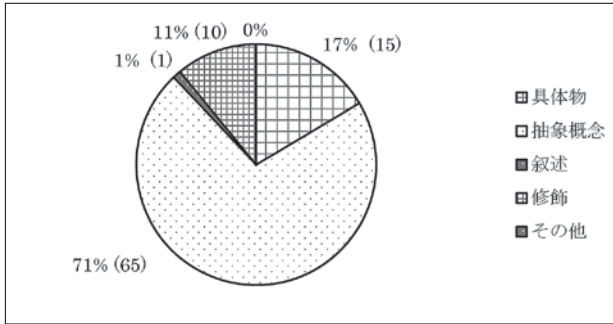


表10-1, 表10-2を比べると, S7において抽象概念に分類される漢語の使用が際立って高いことが分かる。韓国語との類似の確認も行くと, 6.2で見たのとほぼ同様の結果になり, 特に変わった傾向が表れているようには思われぬ。そこで, それぞれの分類における α 基準と β 基準に判定を見る⁷こととする。

表 11-1 S1の発話における漢語のレベル判定

C	0	2	0	0
B	4	16	2	5
A	18	10	1	7
判定	具体物 (22)	抽象概念(27)	叙述 (3)	修飾 (12)

表 11-2 S7の発話における漢語のレベル判定

C	3	9	0	0
B	20	45	1	7
A	15	11	0	3
判定	具体物 (37)	抽象概念(65)	叙述 (1)	修飾 (10)

表11-1, 表11-2を比べると, S1は具体物に関してはA判定のものが多く一方, S7はB判定のものが多く, C判定のものも用いている。これは,

S1がごく一般的な名詞を用いて身近な話題について発話を行っているのに対し、S7は、もう少し詳細な叙述を行っているということの意味する。抽象概念を表す語彙に関しては、半分近くが『実践日本語教育スタンダード』のリストにない語彙であり、筆者が独自に判定を行った語であった⁸。「4.2 結果（語彙の多様性と発話内容領域）」において、日本語においては語彙のカバー率が高くないことについて触れた。このことを併せて考えると、難易度が高く抽象的な議論をしようとした場合、具体物を表す語彙だけでなく、所与のテーマに沿った抽象概念を表す語彙が必要となるということになる。そして、このことは、Can-do型の上級タスクにおいて必要となる語彙数は、想定されている語彙数よりもっと多くの語彙数が必要になるという可能性につながるだろう。

また、S1が用いたC判定の語彙を見ると「託児」「零下」の2つであった。使用語彙の幅は、個人差によるところが多いと言われるが、この2つの語彙はその典型であるように思われる。「託児」も「零下」も難易度としては日本語能力試験の出題基準に記載のない級外語彙であるが、韓国語読みの同形語は存在し、大まかな意味一致もする。そのため、被験者にとっては、C判定にあたる親密性が低く難易度の高い語彙であっても、身近な分野の語彙であるため、使用語彙として用いられていたのだと解釈できる。

7. まとめ

以上、中級と上級の日本語学習者のOPIの発話データから、漢語の使用について、韓国語との類似、難易度、抽象性について概観してきた。抽象性の高いタスクの遂行には、予想通り抽象概念の高い語彙が用いられる傾向があることが分かったが、しかしながら、語彙の意味を知っていることが、そのまま当該語彙を運用できることにつながるわけではないことが確認された。また、S1の発話者のデータから、学習に支えられた語彙や身近な語彙に関しては、運用力が高いことも見て取れた。さらに、S7のデータから、難易度と抽象性が高くなればなるほど、具体物を表す語彙だけではなく、所与の話題における概念を包括する抽象的な語彙が必要とされるのではないかとということが示唆された。今後、語彙獲得と言語運用を考えた学習デザインを策定する際、考慮していきたい。

最後に、今後の課題をあげる。今回は扱ったデータ数が非常に少なく、

学習経過における一時点を観察するのみにとどまった。効果的な学習デザインを考えるためにも、今後はさらにデータ数を増やし、同一話者の学習の経過に沿った通時的なデータの蓄積、品詞や語彙動詞の共起性、誤用に関する詳細な分析を行っていきたいと考える。

また、漢語が存在する中国語との対照も重要な課題である。中国語との対照は、中国語母語話者による同形語の漢語動詞の誤用分析(庵 2010)や、同形語辞典(『日中同形語小辞典・甲』2011)などに知見の積み重ねを見ることができる。もし仮に、中国語を母語とする日本語学習者に対し、本稿で行った調査を同様に行うと想定すると、中国語が持つ特性から、本稿において見られた結果と共通する現象と共通しない現象が見られる可能性があり、より普遍的な考察に近づくことができるだろう。今後、日本語、韓国語、中国語における同形同義語、同形異義語、同形類義語の包括的な研究を一層進めて行きたいと考える。

参考文献

- 秋元美晴 (2002) 『よくわかる語彙』 アルク
- 庵功雄 (2010) 「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因：非対格自動詞の場合を中心に」 『日本語教育』 146 日本語教育学会 pp.174-181
- 荻原雅佳子・齊藤真理子 (2010) 「意見述べにおける抽象性 ―その表れ方と教育への指針」 『日本語OPI研究会20周年記念論文集・報告書』 日本語OPI研究会 pp.121-1131
- 荻原雅佳子・齊藤真理子・増田真佐子・米田由喜代・伊藤とく美 (2001) 「上・超級日本語学習者における発話分析：発話内容領域との関わりから」 『世界の日本語教育』 No.11, 国際交流基金 pp.83-102
- 荻原雅佳子・増田真佐子・齊藤真理子・伊藤とく美 (2005) 『日本語上級話者への道きちんと伝える技術と表現』 スリーエーネットワーク
- 日本語と韓国語の同形二字漢字語の形態統語的類似性と相違性に関するコーパス研究
金庭久美子 (2003) 「韓国語母語話者の動詞の使用状況」 『横浜国立大学留学生センター紀要』 10 pp.53-66
- 高木南欧子 (2013) 「韓国人留学生の自然発話に見られる誤用」 『言語研究』 vol.22 神奈川大学言語研究センター pp.141-158
- 日本語教育学会 『新版日本語教育辞典』 (2005) 大修館書店
- 橋本直幸 (2010) 「OPIデータに見る『話題』と『語彙』の関係 ―OPIデータを用いた語彙研究」 『日本語OPI研究会20周年記念論文集・報告書』 日本語OPI研究会 pp.112-120

- 橋本直幸 (2011) 「学習者コーパスから見る 超級日本語学習者の言語特徴」『日本語教育 文法のための多様なアプローチ』森篤嗣・庵功雄編 ひつじ書房 pp.241-257
- 橋本直幸 (2014) 「語彙調査に基づくタスクの分類」『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』金澤裕之編 ひつじ書房 pp.287-303
- 牧野成一 (1987) 「ACTFL言語能力基準とアメリカにおける日本語教育」『日本語教育』Vol.61, 日本語教育学会pp.49-62
- 牧野成一 (1991) 「ACTFLの外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『世界の日本語教育』No.1, 国際交流基金pp.5-22
- 牧野成一・鎌田修・山内博之・齊藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子 (2001) 『ACTFL-OPI入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク
- 山内博之 (2003) 「OPIデータの形態素解析 —判定基準の客観化・簡易化に向けて」『実践女子大学文学部紀要』45 実践女子大学文学部 pp.1-10
- 山内博之 (2004) 「語彙習得研究の方法—茶筌とNグラム統計」『第二言語としての日本語の習得研究』7 第二言語習得研究会 pp.141-162
- 山内博之 (2012) 「非母語話者の日本語コミュニケーション能力」野田尚史 (編) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版
- 山内博之編, 橋本直幸・金庭久美子・田尻由美子・山内博之 (2013) 『実践日本語教育スタンダード』ひつじ書房
- 尹亨仁・車春香 「韓国語と日本語の2字漢語動詞に関する一考察 —韓日辞典に見られる異同を手がかりに—」『神奈川大学言語研究』神奈川大学言語研究センター pp.1-24

参照資料

- 「KYコーパスversion1.2」入手方法は山内 (2004: 158) を参照。
『実践日本語教育スタンダード』(2013) 山内博之編 橋本直幸・金庭久美子・田尻由美子・山内博之 ひつじ書房
- 『新潮現代国語辞典』第二版 (2000) 新潮社
- 『日中同形語小辞典・甲』関中研編 (2011) 白帝社
- 『日本語能力試験出題基準』(1994) 国際交流基金 凡人社

参考教科書

- 『できる日本語 初級本冊』(2011) 嶋田和子監修できる 日本語教材開発プロジェクト アルク
- 『日本語上級話者への道 きちんと伝える技術と表現』(2005) 荻原稚佳子・増田眞佐子・齊藤真理子・伊藤とく美 スリーエーネットワーク

『日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』(2007) 荻原稚佳子・齊藤眞理子・伊藤とく美 スリーエーネットワーク
 『分類語彙表 増補改訂版』(2004) 国立国語研究所 大日本図書

注

- 1 「KYコーパス」は、90人分のOPIテープを文字化した言語資料である。中国語、英語、韓国語がそれぞれ30人ずつで、30人のOPIの判定結果別の内訳は、それぞれ、初級5人、中級10人、上級10人、超級5人ずつとなっている。
- 2 上級のデータが4本であったため、中級も同じ4本とした。
- 3 MeCabは、オープンソースの形態素解析エンジンである。形態素解析用辞書Unidicは、国立国語研究所で規定された「短単位」で設計されている。本稿で使用したのは、UniDic version 1.3.12, MeCab用である。
- 4 正しく品詞分解されないことがあるため、テキストを形態素解析エンジンにかけた後、解析結果を確認し、一部解析結果の修正を行った。発音に誤りのある語のうち、前後の文脈、韓国語の発音から容易に類推できるものは、書字形のバリエーションの一つととらえ、発話されているものと判定した。
- 5 「リーディング チュウ太」は、日本語読解学習支援システムで日日辞書、日英辞書、旧「日本語能力試験」を基準に難易度判定を行う語彙、漢字チェッカーを備えている。本稿では2014年8月19日に更新されたバージョンを使用した。
- 6 正しく解析されなかったものに関しては、『日本語能力試験出題基準』を参照し、修正を行った。
- 7 「情報」のような語彙は、話題によってA判定の場合もB判定もある。その場合は、どちらにも分類しているため、数値は延べ語数で示している。そのため、各分類の総合計が元の数と合わない箇所がある。
- 8 「財閥」、「支持」、「社内」、「審査」、「世襲」、「脱出」、「都合」、「内容」、「公共」であったが、そのうち、「財閥」、「世襲」、「脱出」、「都合」、「内容」が分類になかった。